

招待講演

「グローバル化と日本の大学」

公立大学法人 国際教養大学 理事長・学長

中嶋 嶺雄 (なかじま みねお) 氏



【プロフィール】

1936年	長野県松本市生まれ	2000～2006年	国際事務総長 財団法人大学セミナー・ハウス理事長
1960年	文学士（東京外国語大学 中国科）	2001～2007年	文部科学省中央教育審議会委員（大学院部会長・外国語専門部門主査）
1965年	国際学修士（東京大学）		
1977年	東京外国語大学教授	2006～2008年	内閣教育再生会議有識者委員
1980年	社会学博士（東京大学）	2008～現在	社団法人才能教育研究会会長
1995～2001年	東京外国語大学長		
1998～2001年	国立大学協会副会長		オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院の客員教授を歴任。
1998～2006年	アジア太平洋大学交流機構（UMAP）		

【著書】

「現代中国論」	「21世紀の大学」
「中ソ対立と現代」	「音楽は生きる力」
「北京烈烈」（サントリー学芸賞受賞）	「全球（グローバル）教育論」など多数。
「国際関係論」	
「中国・台湾・香港」	中国、台湾などについての評論活動で、2003年度「正論大賞」受賞。

皆さんこんにちは。中嶋でございます。秋田から参ったのですが、金沢も紅葉が綺麗で、大変すばらしいキャンパスだと思っております。大学にとって一番重要なのはカリキュラムなのですが、もうひとつ景観が非常に大事で、その意味では金沢大学は、日本を代表する美しい景観を持っているキャンパスではないかと思っております。

私どもの大学は、森の中にあるいわば辺鄙なところなのですが、景観は大変良く、留学生も多いので、アメリカのニュージャージーあたりのカレッジではないかとか、言っております。学長室から1分歩きますと、秋田杉の森があり、森の中には春になるとミズバショウの群落が咲き乱れるという、そんな環境でございます。

今日は、パンフレットをお配りしてございますので、お開き下さい。パンフレットの最後のページに、空から見た国際教養大学があります。空港からも非常に近く、車で約5分です。ある大学の先生がリクルートカレッジの、「マネジメント」に大学のことを「これからの大学が成功するかしないかは、空港からの近さによるのでは」と書いていました。その点では、金沢大学の場合はちょっと遠いかもしれませんが、それに勝る景観があります。是非、その景観を大事にして頂きたいと思っております。

私どもの大学は、門も塀も垣根も一切ありません。図書館は24時間365日開いており、約8割がオンキャンパスで生活できるような環境になっております。42ページの図書館は最近、国際建築賞とか幾つかの賞を受けております。日本建築学会の会長もやった仙田 満さん、東工大の名誉教授でもあるのですが、彼と私と意気投合しまして、県からの予算が、当初は11億ぐらいが、秋田県も財政事情が厳しいというので県議会等でいろいろ議論があって、9億ちょっとに減らされました。その代わり木造でやろうということになりました。むしろ減らされたのを奇貨として、秋田杉で図書館を作ってみた結果がこの図書館であり、365日24時間開いております。県との交渉の中では、労務管理の問題や、危機管理の問題とかいろいろ言われたのですが、その時に私

が強く主張したのは、「図書館は大学にとっての心臓である。コンビニが24時間開いているのに、なぜ大学の図書館が24時間開けないのか。」という一言です。それで寺田前知事にも、納得して頂きました。非常に、活用されております。学生も朝4時ごろまで勉強したり朝早く起きてきて勉強するとか、図書館というのはいかに使い勝手が良いかが重要で、私にはいろいろな図書館経験があります。オーストラリア国立大学のMenziesライブラリーという大学院専用の図書館で今から30年ぐらい前、私は学位論文を書きました。テーマは、当時の中ソ対立。その中ソ関係に関する文書が、なんとオーストラリアの図書館にしながらふんだんに揃っているのです。金沢大学も人文系がありますから、Foreign Relations of the United Statesというアメリカの外交文書が入っているかどうかちょっと調べて頂けるとと思います。東京外国語大学にも入っていない。オーストラリア国立大学の大学院用の図書館には、全部揃っていました。中国の「人民日報」などの新聞や文献も、ロシアの文献、皆揃っていました。それをふんだんに借りてきて、1年間かけて研究室で学位論文を書くという経験があります。もう一つの経験は、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院です。大学院で、私は1年間教鞭をとりました。アメリカの大学院生は本当に良く勉強します。日本ですと、私も自戒を含めて、ゼミで課題を与えて、みんなでちょっとずつ発表して、そして論文を書いて、修士論文なんかはすぐ大体出るとというのが一般の大学です。アメリカの大学は、Assignment、課題も多いし、場合によれば10冊ぐらいの本を1週間で読んでいかなければいけない。数冊の本を1晩で読まなければいけない。先生も学生も非常に緊張感があります。遅刻もないし、休講も無い。ところが、日本の文系の大学ですと、その辺が非常にルーズであったり、ほとんど大学に来ない先生も居たり、散々そういう経験がありますが、その点でMenziesライブラリーと同じ様にIR/PS (International Relations and Pacific Studies) という、大学院大学の図書館は非常に使い勝手が良い。その2つの図書館をモデルにしております。従って開学の時には、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院で勤めたPh.D.を持つライブラリアンに来てもらいまして、1年間グローバル・スタンダードの図書をどのように揃え並べるかということをやって頂きました。つまり、図書館というのは一つのシンボルで、外大の図書館も、東大の図書館も、あるいは国会図書館も、時間ばかり掛かってなかなか本が手に入らない。これでは図書館ではない。その反省から、まさにグローバル・スタンダードの図書館を作っているつもりですので、皆さんも、もし機会がありましたら是非見学に来て頂きたいと思います。

さて、今日、私が頂いているテーマは、「グローバル化と日本の大学」です。グローバル化というのは本当に文句無くこれから進んでいく訳です。そのグローバル化と国際化とはどう違うのかを、本日のテーマが学生支援ということですので、テーマに関連させながら、最初にお話ししたいと思っております。グローバル化はもう文句無し。これは良いことも悪いことも色々あり、グローバル化はアメリカ化ではないかという異議申し立てもありますが、世の中はどんどん動いています。私どもの大学は世界各国の大学と交流協定を結んでおり、今115校になりました。つい最近も、提携校の1つであるルーマニアのブカレスト大学に私が行き、学生も向こうから来ていますが、あちこちの大学に行って協定を結びます。ハンガリーというとブタペストがすぐ想い浮かぶと思うのですが、ウィーンに近いハンガリーの南のほうにペーチという大学があります。街全体が世界遺産のような美しい町です。オーストリア・ハンガリー帝国の名残があつて、彼らはかつて社会主義のハンガリーであったことをむしろ非常に恥じているような、ウィーンにも近いので、ハプスブルグ家の一員であるという誇りを持っています。ここは医学部もあり、ハンガリーで一番しっかりとした医学部だと思えます。そのハンガリーが、EUに入りました。グローバル化に対応しようと。EUに入った途端オランダから安いチューリップがたくさん入ってきて、ハンガリーの農家は困っているという、今、日本が当面しているのと同じような問題があります。そういう状況の中でいかに対応していくかということに真剣に取り組んでいました。グローバル化というものがもたらす様々なインパクトもありますが、だからといって、ハンガリーはEUから脱退出来るかと言うともう出来ない。私の友人のフランス人のクロード・カダールさん、フラ

ンスでトップの中国研究を担った人なのですが、ナチスの占領のことがあるのか、彼はドイツが嫌い、ある意味では非常にナショナリストなのです。そのようなフランス人がフランを捨ててユーロを使い始めた。そこに大きな意味があります。ドイツもマルクを捨ててユーロに統一した。おそらくグローバル化の方向にどんどん向かって行かざるを得ないのではないかと。それなのに日本の大学は、はたしてグローバル化に対応しているかどうかというのが私の課題です。依然として日本人が日本人を、日本語で教えているというのが多くの大学の現状だと思います。大学という知的コミュニティは、まさに開かれたグローバル化の中に居なければいけない。特に日本の人文社会系大学はそういうところが多い。学長から金沢大学は教養教育が非常に充実しているというお話がありましたが、ほとんどの大学が教養教育を捨て去ってしまった。学部にとって一番大事なのは教養教育です。それが、90年代初頭の大学設置基準の大綱化や大学院重点化の影響もあって、すっかり学部が空洞化してしまいました。ここにも多くの問題があると思います。新聞や雑誌の肩書きを見ると、よく大学院教授とありますね。こういう肩書きは、世界に通用しない。ハーバード大学の先生が、大学院教授なんてこと言いません。当然、彼も大学院を教えています。このような文教教育の歪みもあり、日本の大学はこのまま行くと本当に落ち込んでしまうのではないかとという危機感があります。私も長く国立大学に居りましたし、国立大学協会の副会長も務めたりしたこともありますので、国立大学は、もっと本格的に改革を進めないといけないというふうな思いが強くなりました。少なくとも東京外国語大学の例を取りますと本当に会議ばかりです。そして、夜11時、12時まで会議をやるけど何も決まらない。こんなことやっていて良いのかと思いました。文系の大学ですから、大学にほとんど出てこない人がいる。授業を本当にやっているかどうかと思うほどの人も中にいて、一方で組合活動を一生懸命やっている。国立大学の法人化の時期の国大協の副会長で法人化の問題担当していて、東京の学士会館で全国の国立大学の学長会議があったとき、どこかで見たことある顔だと思ったら、うちの先生なのです。ゼッケンを背中に、法人化反対を叫んでいる。大学に帰って調べたら、その先生の授業がある日なのです。授業がある日にゼッケン背負って法人化に反対するデモやっても、処罰が出来ない。教育公務員特例法という、私に言わせれば戦後最悪の法律が、国立大学、公立大学の先生だけを異常に身分保障しているのです。私学の先生も大学の職員も対象にならない。教育公務員でなければいけない。それがいかに日本の大学を駄目にしているのか。特に、2004年にすべての国立大学が法人化され、公立大学法人として私どもの大学が第1号として、最初に法人化としてスタートした訳ですが、それまでは外国人が大学の学長や学部長ばかりか正規の教授にもなることが出来なかった。つい最近まで、日本はそんなことやっていた訳です。世界にそんな国は他にはほとんど無いと思います。というのは、公務員でなければ管理職に就けない訳ですから。私どもの大学は、開学早々グレゴリー・クラークさんという、多摩大学の学長をした人に副学長になって頂きました。日本の大学がいかに内向きで閉鎖的であるか、私はそれを「知の鎖国」Intellectually Closed Shopと言っています。この「知の鎖国」状態が依然として続いている。そして、カリキュラム改革が出来ない。大学にとって一番重要なのはカリキュラムです。カリキュラム改革はお金をかけなくても、もちろんお金を必要とすると思いますし、運営費交付金が減られることは困ったことですが、運営費交付金が増額になれば、大学のカリキュラムが変わるかと言うとなかなかそうじゃない。カリキュラムの後ろには人が付いて人が付いているがゆえになかなか改革が出来ない。例えば英語教育。私どもの大学は、英語教育のやり方を根本的に改めていますので、入学して3~4ヶ月、英語集中課程を終えますと、国際問題が議論できるようになります。関学早々の時に、トップ諮問会議の委員をお願いしている大宅映子さんと、有名なアメリカの日本文学研究者のドナルド・キーン先生がいらっやいまして、学生たちがイラク問題をディスカッションしているのを見て本当にびっくりされていました。やろうと思えば出来るのです。それは、大学の教育が、カリキュラムが駄目だから出来ないのであって、やろうと思えば4ヶ月の集中講義で国際問題が話せるようになります。いまでもCNNやBBCのテレビのニュースも聞けますが、

多くの日本の大学生にとっては、ほとんど雑音にしか聞こえなくて、英語を10年間ぐらい学んできてほとんどを聞き取れない。英語を使えない。これはまさに英語教育に問題があるのです。ですから、そういう英語教育を改革しようと思って東京外大でも努力したのですが、なかなか肝心の英米科の先生が反対するものですから出来ない。こういうことをずっとやってきて、会議ばかりやっている結果が、いまのつけになって回っているのではないかと思います。英語の先生がいると恐縮ですが、日本の英語の先生の大部分は、80~90%が“文法主義者”です。ですから、SVOとかSVCとか、スペルが正しいか、どこにイントネーションがあるかとか、受験英語もそういうことをずっとやって来ていました。最近センター試験の英語もだいぶ良くなり、リスニングも入りましたが、メインは依然として読む英語です。例えば、フォークナーの専門家の英米文学者が英語を教えているとすると、それをみんなで少しずつ読んで、あるいは訳して、そして最後にテストをして終わりでしょう。こういう英語教育がまだメインだと思うのです。それではいくら英語教育をやってもCommunicableな、つまり国際語としての英語をツールとして、工具として、道具として使って相手に語りかける、相手と話をする、Communicableな英語が出来ない。だけど、やろうと思えばいくらでも出来るわけで、それには教員の意識が根本的に変わらないといけないし、変わらない教員にはやめてもらわなければいけない。そういう改革が急がれると思うのですが、それがほとんど出来ないのはカリキュラムの後ろには人（教員）がいるからです。そして結局、教授会を中心として物事を決めるわけです。大学自治、学部自治というもの、いかにも今この時代に合わないか。学長を選挙で選ぶ大学がまだ多い。そうすると学長は思い切ったこと出来ない。次の選挙に再選されないかもしれない。そういうことをやっているのは、日本の大学だけと言っても過言ではない。学生を充分教育しないで卒業させる。日本の大学の4年での卒業率は91%のOECD諸国の中でそんな大学は日本だけです。私どもの大学は、4年で卒業率はこのところ50%前後です。その代わり Semester制を取っていますので、4年半、あるいは5年、こんな良い図書館が出来たのだからもうちょっとゆっくり勉強したいとか、留学を義務付けていますから、留学から帰ってすぐばたばた就職活動をするのではなく、もっと自分を磨いて、じっくり大学生活を終えたいと言う学生が結構います。就職も、おかげさまでこのところ100%が続いておりますが、企業も変わりつつあります。ユニクロや楽天が英語を公用語にするような体制を作り始めているように、企業も変わります。大学も変わらなければいけない。しかし大学は変わらない、変われない。そこに大きな問題があるように思います。さて、そういう日本の大学の現状をお話しする前に、グローバル化と国際化、まさに両方とも大きなテーマですが、グローバル化と国際化はどう違うと考えたらいいでしょうか。Internationalization, Globalization、きょうここには学生さんもいらっしゃるのでしょうか。どう違うと思いますか。グローバル化と国際化。どうぞ。

【金沢大学2年生の安西と申します。はっきりと具体的にはイメージしにくいのですが、感覚として、国際化は横につながっていくような感じであって、グローバル化は、ネットワーク上にどんどん、国と国ではなく個人の全てが国境を越えるようなイメージがします。】

はい、ありがとうございます。もう一人女子学生の方。いかがですか。あんまり考えたこと無い？

【あんまり考えたことありません。】

やっぱり考えてみてください。今の答えはなかなかいいです。グローバル化とは、まさに地球化。グローブ、私の本に「全球」と書いてあります。グローブを中国語で言うのが一番わかりやすい。「全球化」と言うのです。中国語ではquanqiuhua、全球化。まさに地球が、瞬時にして繋がってしまうような立体的な概念です。それに対して国際化というのは、水平的な概念です。日

本と中国とか、日本とアメリカとか。ホリゾンタル (horizontal) な関係であるのに対して、グローバルは、まさにマルチバーティカル (multi vertical) と言うかマルチダイメンション (multi dimension) の関係。個人も含めて時差も関係なくなる、そういう時代がもう来ているのです。ですから、国際教養大学は全ての授業を英語でやって、教授会も教育研究会議も英語でやるものですから、英語力の強い職員を採用しています。全世界に広がる提携校 (現在、115校) とは、夜中でもメールを打ったり、電話をかけたりしています。もともとその言葉を探して言うと、インターナショナルっていうのはネイションが基礎です。国連のことをユナイテッドネイションズ (United Nations) と言う。国連という訳語は間違いで、本当は連合。lianheguo中国語では。ユナイテッドネイションズを国連と訳したから間違っているのですが、これも正していなくてはいけない一つの課題だと思います。多くの国が国際的に参加しているから国連ですが、今や世界が一体化する立体的な時代になってきています。じゃあ、グローバル化、ネイションズではなくて、ネイションが基だからインターナショナルだとか、インターネイション、名詞形になってインターナショナルライゼーション (Internationalization)。グローバル化はいつ頃から始まったのでしょうか。そのメガネかけた女性の方、いかがですか。

【最近だと思います。】

はい、いい答えですね。最近。明治時代からグローバル化があったわけじゃない。ここ約20年です。ベルリンの壁が崩壊して20年。ソ連が崩壊して、来年が20年。私は、印象的な思い出があります。1989年大きな出来事がアジアでありました。その向こうの学生さん。89年に、アジアで、最近の日本との話題と関係するような出来事があったのです。わかりますか？

中国の天安門事件です。まさにあの時に抵抗した、異議を申し立てた劉曉波 (りゅうぎょうは) さんが、いまノーベル賞授賞式に出られないように獄中にいます。中国が圧力をかけている彼はあの時の活動家の一人です。89年の天安門事件とは、私は元々中国研究が専門ですから、私自身にも衝撃でしたし、当時、テレビですっと解説をしていた記憶がありますが、これが東欧諸国にもものすごいインパクトを与えたのです。ハンガリーもそうでした。東欧諸国も独裁体制でしたから。特に東ドイツの知識人たちは、非常に衝撃を受けました。カール・マルクスも教鞭を取った事があるという東ドイツのフンボルト大学の先生方が、東ドイツは当時ホーネッカー (Erich Honecker) という人が独裁体制で、すぐベルリンの壁の東側にあるマルクス・エンゲルス通りとかマルクス・エンゲルス広場とか、第2の天安門広場になるんじゃないかと恐れていました。すでに抵抗運動が起こっていましたから。私は、そのフンボルト大学に招かれて、天安門事件に関する基調報告をシンポジウムで致しました。東京外大の私のゼミの学生も、何人か一緒に行きまして、外国人の特権で、西ベルリンに出て、ベルリンの壁を乗り越えようとして犠牲になった人たちへの花輪が、たくさん掲げてあるところも見ました。つまり東と西から壁を見たのです。その直後に、ベルリンの壁が崩壊しました。学生は、非常に臨場感がある、いわば現代史の現場を体験したわけです。

もうひとつ、アメリカの大学で同じようなシンポジウムがありました。会議に出た後、教授の家に招かれたら、「中嶋先生はどんな論文を書いていますか？ ちょっと見てみましょう」と言っていて、インターネット、今で言うとパソコンでアクセスしたのです。私も英文の論文をかなり書いていますが、それが画面一杯出てきて、その頃まだ日本はそうならなかったのでびっくりしました。だけど今や、それが当然のことになり、尖閣のビデオがユーチューブで出るような、そういうIT革命がものすごく進んでいます。これはいいとか悪いとか言ってももはや、不可逆的というか、後に戻ることができない大きな変化です。それが起こったのは近々20年ちょっと前です。ソ連という重厚な大きな社会主義の大国が、あっという間に崩壊しました。ソ連が崩壊したのは1991年ですから、来年が20年。最近のことなのです。この最近の変化はものすごい、そ

してもう後に戻れない、これからもっともっと変化するでしょう。英語で言うとイリヴァーシブルといいます、そういう不可逆的な変化がどんどん進んでいるというのに、日本の大学はどうでしょう？ほとんど変わっていない。設置形態は法人化して変わった。意思決定のメカニズムも少し変わったとはいえ、肝心なカリキュラム改革がなかなか出来ていない。大学が本当に変わったことにはなりません。私は新しい大学を秋田県が作るというので、この少子化の時代に、今までと同じような大学を作っても全く意味がない。むしろ作らないほうがいい。しかし本格的な、従来の大学と違ったグローバルな大学をつくるのであれば、私もお手伝いしましょうということになり、起ちあがりました。

この国際教養大学は、すべての授業を英語でやっています。勿論、日本語を勉強するためにきている留学生には、日本語の授業はあります。そのために外国人の先生が教員の半分以上です。小さな大学で定員が100名からスタートしました。そして慎重にシミュレーションをやりながら、120名、150名と増やして行って、来年は175名の定員になります。あさって、特別選抜の試験がありますので、私はあさっての朝には、明日秋田に帰ります。推薦入学でも20名の定員に対して199名が応募していますので、10倍と倍率が高い。一般選抜だともっと高くなると思います。教員を、最初の時に20名募集するのに、561名が全世界から応募してきました。そして3人の先生が私を含めて、丸をつけて、二つ丸がついた人を残したのです。東京の都道府県会館の秋田県東京事務所に来てもらって面接をし、模擬授業をやって頂きました。どんな偉い人でも、どんなに有名な人でも必ず模擬授業をやって頂きます。英語教育にTESOL（教育学英語教授法）がありますが、テソールとは外国人に英語を教えるための特別のその授業方法なのです。コロンビア大学のテソールの主任教授が、今度客員教授として来て頂くときにも、模擬授業をやって頂きました。ケンブリッジ大学の博士だという人も応募してきましたがどうもその教え方が……。その人はケンブリッジ大学でPh.D.（ピー・エイチ・ディー博士号）を取ったわけですから、それだけ見ればたいへんです。しかしカリフォルニアにおける日本の航空機産業の参入のあり方についてという非常にスペシフィック（specific）な論文で学位を取っているわけですから、リサーチャーとしてはいいかもしれないけど、17歳や18歳の人に教養教育を教えるには、不適格なのでやめて頂きました。それらの結果が今の大学の教員層を作っています。いい教員を選ぼうと思えば、全世界的に公募すると、日本の国立大学よりちょっと高いくらいの給与なのですが、たくさん来られます。英語でやって頂きますから、日本人の教官とか、非常勤の先生には秋田まで来ていただくので、報酬はかなり出しています。しかし特別高いわけではなくても教員は集まります。教員を集めるときには必ず模擬授業をやる必要があります。金沢大学はリサーチとエデュケーションと両方やっていると思いますが、教養、リベラルアーツの大学ですから、やっぱり教育中心です。研究所の研究者としていかに優れた業績を持っていても、何も知らない学生に教えるには教育ですから、しょっちゅう評価を致しますし、ピュアレビューでは、お互いに授業を見ますし、見学者も多い。そういう形で全ての教職員は3年間の任期制。そしてその年のいろいろな公平な評価リストがあり、評価がいい人は、例えば1000万円の教授だったら、1200万円になり、評価が悪いと800万円になる。今年からアメリカ的なtenure制度と日本的なemploymentのシステムを参考にしながら、AIU型のtenureを決めました。4人の先生がapplyしましたが、2人はtenureになりました。外部の先生も入って評価します。もうひとつグローバル化の標準の中で一番大事なのはセメスター（semester）制を完全にとるということです。9月入学もあります。この9月には留学生が定員150名の大学に対して、161名が入学してきました。ですからキャンパスは常に異文化空間。1年間学生が留学しますから、その分、1年間向こうから来られます。

学生にとって一番いいのは、留学先での授業料が相互免除であること。そのために事前の交渉を非常に丹念に、私自身も行ってやりますし、寮があるかどうかもちろんと見てきます。外国人の留学生はほとんど全部寮に入るようになっています。もちろん日本人とのシェアをしていますから、異文化交流には非常にいい。相手のアメリカ人の学生が洗濯物をためておいて洗わない。

トイレを掃除しない。どういうふうにおもうか散々迷ったけれど、ある日思い切ってそのことを言ったのだそうです。その一言が彼を反省させて非常に仲良くなって、今は彼が来たオレゴンの大学に留学していますが、そういう日常的な異文化理解、異文化交流を常にやっています。そのためにはやはり9月入学にしないと。日本は桜の季節。会計年度のはじまりの4月1日はグローバルなスタンダードではない。思い切って9月入学も取り入れています。もうひとつはセメスター制とともにカリキュラムにもインターナショナルコードをつけていますから、留学生が、日本に来て研究生になって、それではじめて大学院に入ることのないように、アメリカならアメリカにいるうちから、インターナショナルコードでカリキュラムをシラバスで調べると、事前にどういう授業を取れるかが分かるようになっていきます。これも是非日本の大学で進めてほしいことです。カリキュラム上も100番台は入門的なコースであるとか、400番台はかなり難しい応用的なコースであるということが、シラバスを見ればきちんと分かるようになっていきます。1年間留学する時の授業料相互免除は非常に意味があって、例えば、アメリカの大学は1年間に学費が200万~300万円です。ですから、53万5,800円の授業料だけで1人迎えるわけですから、先方にとっては損です。赤字になる。それを埋めるために、向こうからは3人受け入れるけどもこちらからは1人であるとか、そういうきめの細かい折衝をしております。提携大学は、ほぼ世界のトップ校です。例えば韓国はソウル国立大学、高麗大学、延世大学、梨花女子大、西江大学。韓国語もかなりやって行きますから、英語以外に、韓国語は日本人にとって学びやすいこともあって1年間いますと英語以上に上手になって帰ってきます。島根県の隠岐の島から第一期生として秋田まで来たチャレンジ精神のあるその女子学生は、食文化に興味があってキックマンに就職していきました。

学生にとっても、安い授業料で行かれるということ。その交流計画は、かなり綿密になります。留学するためにはTOEFL (PBT) のテスト550点をクリアしなければいけないのですが、547点でも、550点の壁は越えてもらわなければ留学は許可していません。その代わりに、もう1セメスター、半年延ばせばいいわけですから。そういうシステムを厳格に採っています。

キャリア支援のことは今日皆さんの話題だと思いますが、インターンシップは勿論やっています。外国でもいいし、日本の国内でもいい。あるいは、インターンシップをやることによって、自分の気が付かないことに気が付く。初めは商社に行こうと思っていたけど、留学してみると日本のモノがいかにいいか、やっぱり日本はものづくりだと商社を辞めてメーカーに入っていくとか、様々な経験を経ることが出来ます。インターンシップには、3単位を与えています。その代わりに英文でレポートを書かせますし、いろいろの評価をもらってきますし、必ずインターンシップの修了証書をもらってくる。そして、評価して、3単位をあげるというのもキャリア支援の一つの材料にしています。

AIUに入るにはかなり厳しい入試の壁を突破しなければいけない。現在、難易度からすると日本のトップになっています。だけど、最近の学生の傾向で、私が若干心配しているのは、AIUに来るといいところに就職が出来る、という受験生や保護者の方が多い。大学は、決して就職のためにあるのではない。勉強した結果が就職になるのであって、決して就職目的の大学ではないし、特に資格を採るところでもない。AIUを卒業すること自体が資格なのだよと強調しています。大学の評価は高まっているとはいえ、そのグローバル社会に耐えるような人材を養成するにはどうしたらいいかということは、非常に大事な課題になってくると思っております。

現代社会が必要とする人材教育の中で、一番重要なことはやっぱり教養教育だと思います。教養教育に付きまして、学びの流れをご紹介します。8ページから9ページをご覧ください。入学しますと、TOEFLによってクラス分けをします。入学式の前後に2回、TOEFLのテストを受ける。TOEFL分かりますね。iBTのPaper-basedの従来のTOEFLのスコアで受けてもらって、能力別に組分けをします。TOEFLの結果が500点以上ですと、英語集中プログラムのEAP3から始める。一番低いスコアの方は、EAP1からで460点。ところが幸い最近、学生の英語力がとにか

く高くなっていますので、今年の入学試験の直後の、入学式の前後の、入学した合格者のTOEFLの平均は517点でした。本当に高くなっています。高いとって、EAP3をスキップして飛ばすことは出来ない。TOEFLの点が高くても、英語教育の基礎はきちんと学んでもらわなければならない。例えば英作文もありますが、英作文IIと英語基礎に、図書館調査手法序論があります。たとえばもちろんコンピューターも入れています。カリキュラムの特徴は、社会科学のところに人口学があります。金沢大学にはデモグラフィ（demography）の授業がありますか？日本の大学の中で、地球人口、世界人口はどうなのかは、非常に大事な授業ですが、デモグラフィの授業がある大学はほとんどない。我々は開学当初から入れています。リベラルアーツの一環ですから、同時に人文科学、社会科学とともに芸術や科学を取り入れています。音楽、芸術論です。芸術論は音楽と演奏。スズキ・メソードの才能教育研究会出身の世界的なヴァイオリニスト渡辺玲子先生が、ひとりあたりのクラスが平均15人以下の少人数を教えています。アメリカのリベラルアーツの大学にはほとんど、スズキ・メソードのインスティテュート（institute）や授業があります。日本で初めてアンサンブルを授業として取り入れました。先生もいい先生がいて、このクリスマスには9月から始めた学生を含めて、モーツァルトのディベロップメント136番を演奏します。私も一緒に弾くことになっていますが、音楽、芸術論や、美術史も取り入れています。教養教育ですから。パリのオペラ座の天井は、シャガールの絵が描かれています。伝統のあるオペラ座の天井をシャガールの絵にするとは何事かと、大変反対があったのですが、ドゴール時代の文化大臣もやったアンドレ・マルローが、彼は小説家でもあり、評論家でもあり、マルローの意見で決まりまして、そのプロセスをソルボンヌ大学でPh.D.論文を書いた先生が美術史を教えています。東北にも豊かな文化遺産がありますから、東北文化も授業の一環として、バストリップ（trip）を含めてやっています。

リベラル・アーツは同時に、Arts and Sciencesとも言います。したがって基本的には文系の大学ですが、生物、化学、科学、物理、それから数学、微分積分も含めて、授業として、選択科目として取れるようになっていきます。そういうプログラムに進むには、やはりTOEFLで500点を超えなければいけない。500点を超えると、基盤教育、教養教育に入っていきます。同時に、複言語主 plurilingualism と言うのですが、英語が出来るると他の外国語も出来るのです。いまヨーロッパでは複言語主義、plurilingualism という言葉がヨーロッパ・カウンスルなんかで唱えられています。基本的に三言語を習得してもらおう。東京外国語大学でさえも、第二外国語はなかなかものにならなかったですが、第二外国語がおのずと習得できるような授業をやっています。その設備があります。大学設置基準によって、実技実験などはたくさん授業を持っても単位が少ない。グローバルに単位を補完しますので、クレジットトランスファー（単位互換）がしやすいように、すべての授業を3単位にしています。そうしますと、週3時間の授業を15週、1セメスターやって、45時間で、例えば社会学なら社会学が3単位です。ところが語学のほうは、週4時間を15週60時間1セメスターやっても、2単位しかない。そのあと1単位分を自学自習するために、外国語のところを見てもらうと実践と言うのがあります。韓国語演習実践は、言語異文化学習センター（Language Development and Intercultural Studies center）でCNNならCNNを納得いくまで聞く。映画のDVDを納得いくまで見る。分からなければすぐ先生に聞く。スピーキングやプレゼンテーションは小さな部屋で出来るような施設になっています。これはおそらく東京外国語大学にも無い。早稲田の副学長がきて感心していましたが、うちの大学でしか出来ないような学習センターになっています。そうしますと、少なくとも三つの言語が出来るようになります。そして、留学生のための日本研究もさることながら、右のほうの専門核科目、そしてその上のところ専門教養教育とある。あくまでも専門科目も教養教育の一環としての専門、本当の専門はいまや大学院です。アメリカのハーバード大学ならハーバード大学の大学院に行く人たちは、むしろリベラル・アーツの大学、カレッジから入ってくる。ですから、学部中心の、専門職大学院も作っていますけれども、大学ですので、教養教育もリベラル・アーツの一環、専門教育もリベラル・アーツの

一環としての専門だという認識を持っています。例えば日本の多くの大学は、防衛問題とか安全保障問題は大学ではやらない。尖閣列島の問題で、こんなにいろいろ日本の外交なり安全保障が脅かされていても、防衛問題はタブーですから大学の授業にはない。総合科目の中に平和科学・紛争予防外交論として、これは国連の事務次長をやっていた秋田出身の明石康教授が授業をやっています。カリキュラムが、いまのグローバルな社会に対応できるかどうか一つの大学の使命でもあり、また、あるべき姿だと私は思っています。

入試に関しては、入口と出口は非常に大事ですので、大学の教員だけではなく入試のプロが入っています。東京外国語大学のときは、1年間外国へ留学して帰ってくると、その先生が入試に関心があるがなかろうが、委員の欄が空欄になるので、みんな入試委員に選ばれる。入試に関係の無い、あるいは興味の無い先生も入試委員をやる。国立大学だから東京外大も受験生に困ることは無い。だけど、これからは大学間の競争が、国際的にも激しくなる時代ですから、入試は本当にきちんとやらなければいけない。我々の大学は、前期後期の、センター試験前期後期の日程から、離脱しています。受験生は私学も受けられるし、他の国公立とも併願できる。前期後期の区分けに何となく、全国立大学、公立大学は従っているけど、なんらの法的根拠も無いのです。国公立大学が私学に対して、まず優秀な学生を集め囲い込んでしまうための、一種の護送船団の方式です。法的根拠が無いので、私どもは始めからそれを離脱しております。そのために全国から非常に質の高い受験生を得ることが出来る。競争が激しいから1点差で合否が決まります。だけど英語だけ見ると、合格者よりもずっと点がいいとか、文系の大学であるのにセンター試験の数学が100点であるという人たちが居ます。入試の公平性がありますから、たくさんはできませんが、若干名、多いときは10名前後、特別科目等履修生で、暫定的に合格させます。これは、大学設置基準と学校教育法に照らして出来る。その科目の授業料を払えばいいわけです。社会人もそういう形で受け入れている。開学当初からやっています。前副学長のグレゴリー・クラークさんが、多摩大学の学長でも教授会で反対されて出来なかった。おそらく国立大学でそういうことをやろうとすると、入試の公平性とか議論百出で結局決まらない。非常にいいことなので、私はすぐやろうということにしまして、始めからやっている。暫定入試で入った人は、2年目に平均点以上の成績を上げた場合、2年目に正規の学生にします。そのときに初めて入学金を払うのです。そういう学生は、実に良く伸びます。ある第1期生は、東京外国大に合格し、そして国際教養大学も暫定入学で入ったのですが、外大を振ってこちらに来てくれました。彼は、暫定入試で入り、その後の伸びがすごくて、モルガン・スタンレーに見事トップクラスで就職して行きました。こういうことをなかなか、大学という共同体では出来ない。それを思い切ってやった。卒業率は、このところずっと50%台。むしろいいことだという観念を植え付けています。マスメディアもこれについては卒業の厳格化として、かなり評価してくれています。留学するにはTOEFL550点。TOEFLを留学から帰ってきた時にも、受けて頂くことにしTOEFLで600点が650点、TOEICで900点以上に皆なってきます。それをやるには、いい加減に卒業させない。企業の方も変わりつつあり、今の日本の就職戦線を考えると、日本も、企業も駄目になる。大学も駄目になるし、企業も落ち込んでしまう。大学に入って2、3年から就職活動をやるなんてことは、本当に間違っています。最後まで勉強してもらい、そして企業もそういう人材を採るような、キャリア支援の体制を是非とって頂けると宜しいと思います。

私の本、『音楽は生きる力』と『全球教育論』、ご関心があれば是非見て頂きたい。英語だけが出来る人材を育てようしているのではない。全学の必読文献は『武士道』です。新渡戸稲造の『武士道』は、いかに普遍的な日本精神を涵養してくれるか、それから、留学中に読むべき学長必読文献があり、例えば、斉藤茂吉の『万葉秀歌』、岩波新書上下巻。これなどは、我々は高校の頃みんな読みましたよね。吉川幸次郎さんの『新唐詩選』とか、今の学生はなかなか読まない。学生からの抵抗もありました。そんな古いもの読みたくない。だけど、そこは学長として頑として譲らずに、読ませています。その教養教育の広さと深さ、本格的な教養教育をしたい。英語が

出来るだけの人材は世の中にも他にもいます。しかし、我々の大学は決して英語学校ではない。日本人にとって一番欠けている情操教育、早い時期から音楽、絵、芸術に親しむ。小学校に来年の4月から英語が導入されますが、私自身が文科省の中央教育審議会の外国語専門部会の主査をしていまして忸怩たる思いがあるのですが、本当は中途半端です。5、6年生から週1時間、年間35時間英語をやっても本当の英語教育にはならない。もうちょっと早い時期から徹底的にやらなければいけない。出来ればスズキ・メソッドのように、耳から聞いて憶える。忘れないですよ。私も子どもの頃覚えたヴァイオリンの曲は、今でも暗譜で弾けます。いわば幼児教育が、いかに外国語教育にも必要か。これは、やろうと思えば出来る。異文化教育と情操教育を早くから日本の子どもさんたちに学んで頂きたいと思います。現代社会が必要とする人材が育つと思います。どうか皆さん今日は、学生支援GPシンポジウムということで、大変いいテーマです。心と体の育成、是非、頑張ってくださいと思います。どうもご清聴有難うございました。(拍手)

(質問)

がん研究所の松本と申します。私は、がんの研究者ですが、なかなか大学のカリキュラムを作るとか、どうしたら優秀な人材を育てられるかということは、大事なことのだけでも、総論賛成各論反対といいますが、実際には、カリキュラムだとか、大学院の教科は、したほうがいいというものがあったても、現在の教員のポジションであるとか、学生が自分の所に来て欲しいとかが優先されていて、こういう人材を作ったらいいという理念が実際には大学の中では進まないのです。恐らくたくさん大学の大学であると思うのですが、そこをブレイクスルー (Breakthrough) するようなリーダーが強い理念、能力と言いますが実行力を持っていけばいいかもしれないけど、なかなか国立大学では、そういかない。そのブレイクスルーしようとするどんなふうにしたらいいかをご意見があれば伺いたい。

(中嶋氏)

今の日本の大学が抱えている一番重要なポイントであり、一番難しい問題だと良く分かります。私も散々そういう苦い経験をしてきました。国際教養大学は全く新しい大学として立ち上げましたから、比較的容易であった。それから、私自身いろいろの体験を積んだ上だったので、視点が揺るがない。これが大事なことです。他の大学と違う変化についても、ちょっと視点が揺らぐとみんな普通の平均的なものになっちゃう。そこを止めるためのリーダーシップを自分としてはやってきたつもりなのですが、国立大学にはやっぱり色々抵抗もあります。夜中に一人でヴァイオリンを弾いて癒されるなんてことも何回もありましたけど、今は比較的なくなりました。国立大学は、いかに病んでいるかという、ガンを開いて頂かなければいけないというふうによく分かります。ですから、思い切って先生ご自身の主張を貫く、それから、とかくその場合に根回しとかが問題になりますけども、やっぱり正論で突破する環境を作っていくことです。日本的な美德の一つとして根回しが社会の和をもたらすといわれますが、今やそういう時代ではない。企業も世界も変わりつつあります。競争の時代ですから、是非、正論で突破するようなことをやって頂くといいいないでしょうか。一つの単位が新しくなる時、一つの研究所が新しく出来る時、そういう時は一つのチャンスだと思っています。どうか頑張ってください。

(質問)

もう一つ。具体的に、一番大事なのは理念とか情熱だと思うのですが、組織を変えようとか言うときに、ディビジョンのシステムは、先生の大学と国立大学とは違うのでしょうか。

(中嶋氏)

多分、違うと思います。国立大学は、人事権を最終的には教授会が持つ。それで散々懲りたも

のですから、国際教養大学では、人事権は、最終的に学長のリーダーシップの下にある経営会議が持つようにしました。教授会の承認は受けるわけですが、学校教育法上、大学設置基準上。しかし、人事権を教授会に置かないことは大きな違いだと思います。

(中嶋氏)

皆さんといろいろまだお話ししたいし、とてもいい雰囲気なのですが、少し早めに金沢を出なければならぬものですから、これで失礼します。どうもありがとうございました。



金沢大学
KANAZAWA
UNIVERSITY

平成19年度文部科学省選定事業
国立私立大学を通じた大学教育改革の支援
新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)



心と体の育成による成長支援プログラム

社会に幸せをもたらす生活の知恵を持った学生の育成

最終報告書



金沢大学保健管理センター

Kanazawa University Health Service Center